スポーツマンの性格特性についての研究～特にサッカー、野球を中心に～

A study of sportsman's character characteristic

1K06B254　　佐々木　忠輝

指導教員　主査　宮内　孝知 先生　　副査　堀野　博幸 先生

〔本研究の動機〕

私は、スポーツ活動が青年後期における人格形成にどのような影響を及ぼすかに、以前から関心があったことから卒業研究のテーマにした。

〔目的〕

本研究の目的は、スポーツが人格形成にどのように影響するのかを明らかにすることである。また、サッカーと野球は人々にどのようにイメージされるのか、そのイメージと性格検査との差について考察することである。

〔研究方法〕

スポーツの性格特性についての文献をもとに、サッカーと野球のイメージについて自由回答方式のアンケート調査を行った。

〔各章の要約〕

第１章では、性格特性について定義をし、外国人の文化と日本人の文化を比較することで、日本人がどのような基本的性格を有しているかを述べた。そして、「個人主義」と「集団主義」についての文化的価値基準の違いを示した。日本人は、「恥の文化」ゆえに「集団主義」的な性格が形成され、「人と人との間に自分がある」と考えるために、全体の意見に従うようになり、相互に尊重し合い、助け合っていくようになることを述べた。

第２章では、スポーツマンを定義し、カリフォルニア人格検査と矢田部・ギルフォード性格検査をスポーツマンに行ったデータをもとに、どのような性格特性がみられるかを考察した。そして、スポーツマンは社交的で、社会的次元でのものごとを成し遂げる力と安定感に優れ、かつ充実感と幸福感を高く持っているという結果を得た。また、スポーツの経験年数によっての差異など、多角的にスポーツマンの性格特性について考察した。たとえば、経験年数１～２年のスポーツマンは非スポーツマンとさほど差異がみられなかった。

第３章では、日本人がもつサッカーと野球のイメージを考察するため、イメージとはどのようなものかを考察した。また、実際にサッカーと野球についてのイメージを一般の人にアンケートした。全体的にはサッカー、野球を行っている人に対して、肯定的なイメージが多かった。その意味で、チームスポーツにみられる性格特性をイメージが如実にあらわす結果になったのだが、否定的なイメージを持つ人々がほとんど同じような回答をしていた。そこで、なぜそのような否定的なイメージをもったかを考察したが、私は回答を示せなかった。また、社会的アイデンティティ理論と集団凝集性という観点からスポーツ活動を考察し、スポーツを継続的に行った場合に、スポーツマンの性格特性に変容されることを述べた。

終章では、サッカーと野球のカリフォルニア人格検査の結果と対照群を比較し、実際にどのような性格特性差があるかを考察した。そして、その性格特性差とサッカー、野球に対して一般人が持つイメージに相違があるかどうかを検証した。結果として、おおかた、イメージどおりの性格特性を備えていることになり、スポーツ活動が性格形成に影響を及ぼしていると直接的

に言えないまでも、可能性は多いにあることの証明をした。しかし、スポーツマンの性格特性をもっと厳密に規定できるようになるには、現在の性格検査がさらに改良されるか、新たな性格検査が登場すること以外にはないものと考えられる。